The Honorary Consul について
― 愛の質的相違 ―

植木　利彦

倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2003年9月30日　受理)

はじめに

グラハム・グリーンは、*The Quiet American* において、アメリカがヴェトナムに平和をもたらすという人為的で偏狭なイズムや観念、あるいは倫理観や正義感を鵜呑みにして、アメリカの正義を無理矢理ヴェトナムに押しつけるパイルのような生き方ではなく、肩肘を張らずに風に揺れる柳の如く自然体でしなやかに、かつ逞しく戦時下を生き抜くフォングというヴェトナム女性の姿を暖かい眼差しで描いていた。そこには人間の作り出した恣意的な観念が如何に人間生活に不幸をもたらす元凶となりえるかを指摘し、それ故各人が自らの信念に従って生きること，言うならば、主体性の確立の大切さを認識させた。その後、*Our Man in Havana* においてはコミカルなタッチで諜報機関のセクト主義を揶揄しながら、夫婦や親子の愛もしくは絆がイズムや倫理観、あるいは国家主義などに勝る大切にしなくてはならないものと語りかける。昨年取り上げた *The Human Factor* では諜報機関の陰湿な国家主義を暴きながら、家族愛と人間愛が大きなテーマとなっている。今回取り上げる *The Honorary Consul*[1] は、グリーンの宗教観を理解する上で欠くことのできない作品と言われているが、その点は多くの評論に委ねることにして、この小論では、家族愛から人間愛への発展の兆しがこの作品では更に顕著に見られるので、愛の最も原始的あるいは基本的な形と考えられる自己愛そして排他的な親子愛や夫婦愛といった家族愛、更に家族愛を超越する人間愛ともいえるより高尚な愛の質的な相違について考察してみたい。

自己愛

自己愛について論ずる前にこの作品で何度も語られる「男の名誉」(machismo) について理解しておく必要がある。マチズモについて野口啓祐氏は次のような説明をしている。

「マチズモとは南米アルゼンチン辺りに独特なスペイン語の方言で、machoつまり『雄』の形容詞形から派生した抽象名詞。一般的には『男らしいこと』を意味する。たとえば、筋骨たくましい肉体を持っていることもマチズモだし、腕力が強いこともマチズモだ。また、名誉を重んじ、勇気をふるい起こして決死の覚悟で自己の名誉を守るなどは、マチズモの極みである。捨て身で猛牛に立ち向かい、剣を突き刺して殺す闘牛士(トレアドール)はマチズモの権化といえよう。この作でも、登場人物の一人で小説家のサアヴェドラが、一風変わったマチズモの鑑ともいうべき男を紹介する。不言実行のこの男、自分を捨てた女房が情夫(ま・ま)に捨てられて再び

自分の懐に戻ってくると、ある日、女房には黙って外へ出かけてゆく。そして情夫のところにゆくと、ヤッパでもってわたり合い、見事に返り討ちにあって果てるという、まことに見事なマチズモ振り。さらに、アルゼンチンの人から聞くところによれば、雄の性質を発揮する意味から、子沢山もマチズモといえるという。恐らく妾の多いことも、男の甲斐性、つまりマチズモになるのだろう。一口でいえばこのマチズモ、人生全ては一天地六の賽の目勝負、卑怯未練な真似はせず、精一杯意気地を張って自分の名前を守り、信条を貫き通して相果てよう、という男伊達、あるいは任侠精神のこと」[2)]

そしてパラグアイとアルゼンチンの国境近くの町の警察署長、ペレス大佐も「ここでは（マチズモ）男の名誉とは生きることの唯一の同義語だ。我々が呼吸する空気のようなものだ。男の名誉（マチズモ）がなければ、男は死ぬほかない。」[3)] と言う。実際、プラーの周りにもそうしたマチズモに取り憑かれたような人間が多く見受けられる。例えば、何もかも破壊し、敵対する相手の意見に耳を傾ける努力もせず、ひたすら殺すことのみを望み、自らも過激で劇的な死を迎えることこそマチズモの極みと見なしているテロリストのアキノ。次に作家サーヴェドラのどの小説にも見られる決まりきったマチズモに取り憑かれた男の物語。サーヴェドラのこのマチズモ信仰は彼の文学世界の幅を非常に制限するので、ある意味では彼の才能を殺し、作品に発展性が見られず、退屈な読むに耐えないものとしている要因とも言えるるのである。彼は中央の文学界で受け入れられるような新しい作品を創作することができないばかりか、作家として駆け出しの頃サーヴェドラが目をかけて文壇に出してやった弟子とも言える人物が今では彼を凌ぎ、文壇で重きをなしてサーヴェドラのそうした小説を嘲笑し侮辱しているのである。その結果、サーヴェドラは大都会ヴエノスアイレスを去り、故郷であるこの田舎町に戻り、かつての知事の息子として、また小説など読む者がいない故に作家として尊敬され、彼の虚栄心（マチズモ）を満たしてくれる生活を何とか維持している。彼の願いは誘拐団の人質になっているフォートナム代わって自分が人質になり、彼を嘲笑している弟子とも言える人物に彼のマチズモは小説世界だけの虚構ではなく彼自身の信条なのだということを証明することなのである。

サーヴェドラのフォートナムを救う行為もアキノの死と対峙したい願望も「男の名誉」(machismo) と映っているが、実のところはアキノの場合、過激な行動と死はテロリストとしての自分の存在を自己主張する一形式に過ぎない。彼には死の虚無を見据えてなお生きることを求める意志は全く見受けられない。サーヴェドラの場合は、フォートナムにたいする愛情や理解からではなく、マチズモ精神を実証する機会に恵まれただけのことである。彼らは妻子もなく、実生活に根を張らない個人であり、彼らの行為は所詮個人的な虚栄心を満足させるだけのものであり、自己顕示欲の成せる技である。彼等の世界には他者を理解しようとする度量もなければ、何ら創造的なものを生み出す可能性もない。そうした矮小な世界に固執する人物をプラーは嫌い蔑視しているのであり、また Greene's novel is written with disdain for 'machismo', the Latin American cult of masculine pride in courage and virility.[4)] しかしながら、将来に何らの希望も夢も持てないアキノやサーヴェドラにとっては自己愛だけが彼等を奮い立たせる原動力であり、彼等の人生に意味を与えられる唯一の拠り所なので、この自己愛に頼らざるを得ないのである。

現実の世界に目を向ければ、空腹と栄養失調のため腹をふくらませている子供たち、亡くなった妻の棺桶も買えない老人、クララの家族のように手足を失うような厳しい佐藤黍刈りや野良仕事に従事する人たち、次の食事を準備することもままならない原住民たち、彼らにとって男の名誉（machizmo）などサーヴェドラの作品を酷評した弟子ともいえるモンテスに言わせれば「その世界は現実には存在しない」(174) ということなのである。今日という日を生き抜くことに悪戦苦闘する彼らの生活にはmachizmoなど関係ない。そのような戯言を口にするのは、数百年も昔、外国から進入してきたコルテス（Hernando Cortez）やピザロ（Francisco Pizarro）などの侵略者に同行してきたスペイン人の子孫たちと考えられるサーベドラや誰に対しても責任のない身軽で偏狭な考えにとりつかれたテロリスト、アキノのような人間のみが口にする絵空事にすぎない。

現実を理解しないアキノやサーヴェドラの言うマチズモなど自己を大切に思う利己的な自己愛に他ならない。彼等は全てこの自己愛に駆り立てられて自己満足を得るために行動しているのである。彼らの行動には他者の幸福を思いやるような利他的な動機は全く見あたらない。

マチズモの遂行とは言えないまでも同じような自己愛の発露は他の人物にも見られる。プラーの母親の行方不明の夫に対する嘆きの言葉は、夫への愛情表現ではなく、大義のために夫に捨てられた妻への同情を呼びおこし、哀れな母親に対する愛情表現を息子、プラー、に強要する母親のエゴイズムにすぎない。彼女も自分は愛されているという事実を確認したい自己愛に依存しているのである。またペレス大佐のひたすら自分の経歴に傷を付けないように職務を遂行しようとする努力にもこうした傾向が見受けられる。大佐はフォートナムは勿論のことリヴァスやアキノたち誘拐団一味の命を救う交渉を行うために小屋から出てきたプラーを射殺したのは彼が指揮していたパラシュート部隊の兵士であることを隠し、リヴァスによって射殺されたと公式発表をして平然としているのである。彼にとっては正義や倫理観、体制の善し悪しなど問題ではなく、自分の職務に忠実であること、そして自分の体面を守ることが全てなのである。そのためには警察署長でありながら平然と真実を曲げることも厭わないのである。このような利己的な人間に見られる特徴は世界は自分のために存在するのであって、自らが生かされている社会を構成する人々に対する内省を欠くことである。

彼等に見受けられる特徴は、自分の唯一の愛の対象たる自分自身に対し情熱的な献身において主我心が如何にうまく隠され、如何に無自覚であろうとも恣意的なものが彼等の動機に見受けられることであり、自分自身に陶酔しているナルシスト的な姿である。

家族愛

単なる自己満足の追求者でない人物は、息子のリヴァスが「弁護士としては有能だったが、貧しい人達のためにはけっして働かなかった。死ぬまで金持ちのために忠実に仕事をした。みんないい父親だと言ったものだよ、莫大な資産を残していったからね。ま、そうだったかもしれない、ある意味では、食べていけるようにするのは父親の義務の一つだから」(230) と言っ

て軽蔑している彼の父親によって示されている。ひたすら働き莫大な資産を残した父親の愛は、その動機の善し悪しは別にして、単なる自己満足の追求だけではなく、家族の幸せを追求する行為、肉親への献身というより大きな愛と言えるだろう。

このようなより大きな愛は、実は Joseph Conrad の作品 *Victory* の主人公、ヘイストと同じように他人との関わり合いを極度に嫌うプラーに見られるのである。プラーは何かを信じたり、愛したりすることがもはやできなくなっている。つまり、彼にとって「『愛』は彼の出会いたくない請求であった、彼の受けかねる責任であった、要求であった」(180-81) と述べられているが、彼のこのような性格は、父親が妻子を顧みず、貧民を苦しめている体制を打倒するためにアルゼンチンの多くの男たちと同じように男の名誉 (machizmo) ともいえる政治活動に没頭し、行方不明になった後、母親の妻子を捨てた父親に対する絶え間ない愚痴を聞かされたことと、息子プラーに母親への愛情表現を執拗に要求したことに嫌悪感を覚え、本心ではないことを言わなくてはならない人間関係を疎ましく思うようになったことにその原因がある。その結果、フォートナムの元売春婦であった妻、クララ、に惹かれた理由も愛を意識させない「彼女の無表情、さらには敵意によってであった。」(103) と述べられているが、その根底にあるものは、プラーとクララの職種の違いはあっても、どちらもあらゆる階級の人と接する点で同じ立場にあることだろう。すなわちプラーは患者の病状を聴き、相手に合わせて治療と薬の調合をするが、クララも相手の男の要求に合わせて振る舞うのである。つまり彼等は単に職業としてあらゆる人に接しているのであって、そこには個人的な感情移入は全く存在しないとプラーは思いこんでいるのである。あるいは感情を持ち込まないように振る舞ってきたことが自分の特性となっていると勘違いしているのである。その結果、男女関係においてもいかなる愛にも縛られることを嫌う気持ちが彼を孤独な存在に追い込み、クララとの関係を恋愛感情を伴わない無感情で無機質的な関係でいられると彼に考えさせたのである。こうした彼の態度はクララに子供ができたとき、その子供を、プラーは人間とは考えず、予想もしなかった余分な副産物、単なる肉片と考えて堕胎するようにクララに要求することによってもっとも顕著に表れている。

しかしその反面、プラーに対し何も要求しなかった父親には親しみを覚えている。そのことが彼をパラグアイで行方不明になった父と最後に別れたパラグアイとアルゼンチンの国境近くのこの小さな都市に彼を引き寄せる力となっている。また、彼はこの地方都市の貧民地区の住民を治療していることも貧民を圧政から救おうとした父親の行為に近い行為を自分も行っていると考えている。そこにはプラーには意識されていないが、父親と同じく民衆に対する深い愛情と同情が見られるのである。更に棺桶の上に負傷して横たわっているフォートナムはパラグアイの警察から逃亡しようとして射殺された父親とよく似た年齢であり、「奇妙なことに、彼が祈りながら思い浮かべた顔は、父のではなく、チャーリー・フォートナムの顔であった。」(176) と言うようにフォートナムに父親の姿が投影されている。従って囚われているフォートナムを救うことが自分の父親を救い出したいと願っていた彼の心情と合致することからフォー

トナムの救出に尽力するプラーの姿には肉親への限りない思慕の念が感じ取られるのである。同時に、フォートナムもプラーのことを「あの男はおれの息子と言ってもいい年ごろだった」(284) と言うように、フォートナムとプラーの関係には疑似親子関係が存在するかのような印象を受けるのである。

囚われの身となったフォートナムに対してプラーが抱く感情は、とりもなおさず、親子の感情に近いものである。この事実は、裏を返せば、プラーは彼が信じている彼自身とは全く違った性質が彼の中で息づいていたということなのである。実際、彼は貧しい人達に医療を通して救いの手を差し伸べているのである。また、彼自身は愛情など信じない、軽蔑していると明言じながら、クララと子供の将来のことを心配しているフォートナムの愛や貧民を救うために司祭の職を投げ出し、政治活動に命を賭ける友人リバスの強い愛と情熱に嫉妬を覚えている。プラーが価値のないものと評価した愛に彼等が絶対の価値を見いだし、命を賭けて行動している姿に嫉妬することはプラー自身が愛に何らかの価値を認めざるを得ないことを裏付けていると言えるだろう。彼等にはプラーにはない何かが存在する。愛する者のために全てが無に帰す死の向こうに夢を実現しようとしているのである。それが彼等の人生を燃え上がらせ豊かにし、彼等に生き甲斐を与えているのである。しかもそれがなければ人生は虚ろなものとなりかねない。それは自分以外の人の幸せを思いやる心であり、同時に本人を生き生きとした人間に変える不思議な力を持つ愛なのである。プラーはそれを認めざるを得なかった。

> Plarr confesses to Rivas, in the novel's crucial scene, his lack of human feeling. He ironically insists that he does not suffer from machismo, but that he is only jealous of Fortnum's love for Clara: "I'm jealous because he loves her. That stupid banal word love. It's never meant anything to me. Like the word God. I know how to fuck—I don't know how to love. Poor drunken Charley Fortnum wins the game "[5]

それ故、彼はクララや子供のために心を砕くフォートナム、多くの貧しい人たちの心の支えとして努力しているリヴァスを救うために役立とうと努力したのである。

> As the pressure of his last hours builds up to a terrible intensity, he is forced to face himself with full honesty, and consequently he discovers those feelings which can save a man from a hollow existence. learning at the last to submit to the irrational demands of his heart, he dies a renewed man.[6]

我々は彼の中に鼻持ちならない母親の自己愛から逃れたい願望と、父親とフォートナムによって培われた家族愛、そしてリヴァスによって喚起された同胞に対する人間愛の胚芽を見ると同時に彼が血の通った人間に立ち返る姿を窺い知ることが出来る。His jealousy, awakening his humanity, becomes in fact the indication of his ability to be.[7]

家族愛を最も顕著に見せているのがフォートナムということになるだろう。父に対する恐怖のなかで育ち、結婚に失敗した現地生まれの英国人。酒浸りの毎日であるが、それも「自己の内なる暗黒を逃れるため」(164) に飲んでいる酒なのである。彼の楽しみは父親が大好きであ

った乗馬ではなく、馬に見立てた「フォートナムのプライド号」という車を乗り回すことと酔っているときだけ孤独な現実を紛らわせてくれるウイスキーだけである。彼は齢60を越え、身内もなくただ一人、この地で惨めな一生を終えようとしているマテ茶栽培業者なのである。その彼がクララと結婚したのは「おれにはなにかをしてやることのできるだれかがひつようだった」(198) という理由だけであった。自分が作った財産を誰かのために残したいという動機からの行動であるが、これは人間は一人で生きることが如何に難しいかを物語るものである。フォートナムは「おれはクララに会うまで寂しかったんだ。ばかばかしいと思われるかもしれんが、おれはあれを見た瞬間、愛してしまったんだ。」(74) と言う。「孤独は、彼が経験から知っていることだが、はるかにたえがたいものなのである」。(134) he sums up essence of his attitude toward his marriage: "When you get to my age you accumulate a lot of regrets. It's not a bad thing to feel you 've made at least one person a little happier."[8] そしてHe believes Clara to be carrying his child, and he clings to life in the hope of having at last done something meaningful in fathering a child.[9] フォートナムは自分の人生で意義あることをここに見いだしているようである。しかしながらそれは若い男性が美しい女性を見て一目惚れする状況とは違って、Charley's love for Clara is characterized by charity, sympathy, kindness, and affection. . . . but on other hand it is never confused with pity.[10] つまり、フォートナムのクララに対する愛は激しく燃える愛ではなく、祖父が孫娘を見守るような慈愛に満ちた愛と言えるだろう。フォートナムのクララと子供に対する心遣いはクララから何も要求しない一方的な愛である。それは献身的な愛とも言えるだろう。そのフォートナムのお人好しさ、あるいは愚鈍さにプラーは真実を打ち明けたいという欲望に駆られるが、愛に無関心であるはずの彼がそれほど強くフォートナムの愛を意識することは、プラーは持っていないが、それ程夢中になり全てを賭けられ、しかもそこに命を賭けられる満足感を得られる愛をフォートナムが持っていることに嫉妬していると言えるのである。

しかしながらクララの子供がプラーの子供であると知ったときのフォートナムの失望感は想像に余りある。さらに追い打ちをかけるように、プラーもクララもお互いに愛し合っているのではなく、二人の関係は売春宿での関係と同じ愛情を伴わない男と女の関係に過ぎないと言うのである。彼女は人間の愛の形として行う行為を欲情のはけ口として提供することによって金銭を得ていたことは愛を完全に否定しているように考えられる。現に彼女は自らの感情は全く見せず、客となる相手のいう事をそのまま映し出す鏡のような無私な女で自らの意図を表明することはない。プラーの言を借りれば、「あの女はまるで鏡だ、と彼は思った、彼女を見る男の姿をうつすサンチェスばあさん手製の鏡だ」(210) という印象を抱かせるくらい客となる男の要求に機械的に応える女性なのである。そこには感情などはなく、仕事としての無感情な対応だけが窺えるのである。サングラス一つでプラーの要求に応えたことはクララが以前の仕事から抜けきっていないというだけでなく、夫のフォートナムをも愛していないということになる。フォートナムが愛した女性は感情を持たない、人を愛せない人間、言うならば、人間の姿をした人形なのだという事実がフォートナムをこの上もなく孤独にさせている。彼女はフォー

トナムのプライド号と同じく一時的に彼の関心を引くが、感情のない物体で恒久的にフォートナムを満足させる魅力はないように思われる。しかし彼女はプラーの意図に反し彼を愛し始めるが、子供ができたことを告げたとき、プラーが赤ん坊を殺すように告げた言葉はプラーには彼女にたいする愛が無かったことを確認したことであり、その結果、彼女は愛されていなかったという事実と、プラーには子供は不要なものという事実を悲しみ、自分も仕事仲間と同じように赤ん坊を殺す可能性があるのではないかという恐怖心に脅かされている。そのことは「彼女にも気にかけるものがある」(282) のであって、悲しむ彼女の涙が彼女にも感情があることをフォートナムに理解させる一助となっている。彼女の愛はその子供に注がれようとしているのである。つまり、人を愛することは、人間の本能的な能力で如何なる状況下で生きていようとも、決して死滅するものではない。彼女の場合、彼女の所に来る男に愛は必要ではなく、機械的に接しておればよかっただけなのである。従ってプラーとの関係において人間としての感情を取り戻したとき彼女は普通の女性として生き返ったことになる。その結果、フォートナムには感情を持たない人形のようなクララを愛することは難しいが、プラーに対する愛情を抱いていたことを知ることは、彼女が人を愛する感情を持った人間である事を確認したことであり、それは彼女は愛するに値する人間であるということを明らかにしたことになる。つまりクララの愛は人生に意義を見いだせなかったプラーやフォートナムを再生させる大きな原動力となっている。

その結果、フォートナムを救うために命を落としたプラーのことを思えば、プラーの愛を失って悲しむクララがフォートナムを最後の頼みとしたとき、自分の息子のように感じていたプラーに代わってクララと子供の将来を見てやる意欲が失意を乗り越えてより大きく成長していく。何故ならクララの子供はフォートナムが自分の息子のように感じているプラーの子供であるから、彼の愛した息子の分身がクララの中に生き続けていると考えている。頼りなく信念のない人間のように見えたフォートナムがこのようなおおらかな豊かな人間性をもって悲しみに暮れるクララとその子供を庇護する愛は大きな救いとなっている。言うならば、フォートナムとプラーとクララとその子供は、プラーを軸にまるで祖父、夫婦、子供あるいは孫のような関係にある。このような家族愛はこの小説一つの特徴とされている‘father’という単語によって象徴されていると考えられる。

> Father' is one of the novel's key words. . . .Eduardo finds himself borrowing the features of Charley Fortnum. . . . Charley is haunted by unhappy memories of his father who made him take the riding lessons, which he still resents. But understanding now why it was that his father drank, he begins to feel sympathy.[11)]

> he(Plarr) and Fortnum are connected by a psychological dependence on their fathers which is an integral part of the crisis of development to which they are forced by the novel's events. Charley Fortnum's shiftless, boozy life is dominated by hatred of his father, a hatred focused on his loathing of horses.[12)]

肉親への愛は献身的な偏愛であり、時には寛容な精神で憎悪を生み出す複雑な関係を乗り超

えて相互理解を導き出し、相手を受け入られる柔軟性を持つものである。そしてその愛がそれまで人生に生きる意義を見いだせなかったプラーやフォートナムに生きる意義を与えているのである。

人間愛

リヴァス神父にとって父親とは子供に苦労をかけない、資産を残すのがいい父親である。その意味では有能な弁護士であった彼の父親は申し分のない父親であった。しかし、広い意味で彼の父親のように高い社会的身分にあるものは、社会の指導者であり、国民の父親となって弱い者、困っている者を助ける責務も負っている。とりわけ水道設備もなく排水溝もない貧民地区（*barrio* of the poor）では民衆が次の食事にも事欠き、子供は栄養失調で腹をふくらませ、粗末な掘っ立て小屋でその日暮らしを余儀なくされている南米各国においては政府の要職にある者は勿論、あらゆる分野の指導者たちはより大きな愛と慈悲の心でもって貧しい人達を援助しなくてはならない。その旗頭となるべきものが教会であり神父ということになる。しかしながら民衆の心の拠り所となるためにリヴァスが頼った教会は、リヴァスの言を借りれば、「日和見主義的な金満家の父親を捨ててかれが頼った母なる教会は、父にも増して日和見な体制ベッタリの金満家だった。飢えのために身が痩せ細った貧民の口に、霊の糧と称して小さな聖餅を放り込みさえすれば、もう司教の務めは済んだとばかり、政府高官のところにかけつけて珍味佳肴に舌つづみを打つ高位聖職者たち、そんなものたちが支配する母なる教会の膝下にあって理想的な神父（ファーザ）になることなど絶対に不可能だ。」[13] 本来、教会は政治に関係する組織ではないが、圧政に苦しむ民衆の心の支えとなり、時には事の道理や真理を時の為政者に説いたり諫言する立場にある。すなわち、教会は社会に中にあって常に父親的な役割を果たすことを期待されている。にもかかわらず、教会が教会としての本来の機能を果たさず、牧師が牧師としての本来の姿を見失っている悲しい時代に生を受けたレノンには教会を去る以外に道はなかった。民衆にたいするリヴァスの愛の高い理想性は、それがあまりにも高いがためにそれを実行しようとする人間に絶望感以外のなにものも感じさせないのである。

リヴァスの教区民に対する愛は全ての牧師が教区民に対して抱かなくてはならない愛である。若いリヴァスには政治的な経験はなく、ただ行き詰まった現実を打開しなくてはならないという若人の持つ意気込みだけが先走り、民衆を苦しめている体制に反抗してきた人物たちを救い出し、体制を倒すことが民衆を救うことになるという純粋な気持ちから過激な行動に向かう。彼の言によれば、「悪い社会においては犯罪者がまともな人間なんだ」（110）ということなるのだろう。この言葉は過激な犯罪行為を正当化しなくてはならない行き場のない時代に生まれた彼の怒りの表現であると考えられる。彼の行為の善悪は別にして、彼は教会と聖職者が果たし得なかった本来の仕事を余りにも急速に実行したいために、過激な行動に出ざるを得ないのであるが、『「南アメリカがおれたちの母国なのだ、エドウワルド、パラグアイでもない、アルゼンチンでもない。チェはこう言っている。この全大陸が私の母国だと。きみはどうなん

だ？イギリス人か？　南アメリカ人か？」』(111) と言うようにその動機は個人を、肉親を、そして国境を越えて南アメリカに住む全ての貧しい人たちに向けられた人間愛である。リヴァスとフォートナムに共通していることは彼等はともに彼等の愛に対してその見返りを期待していないことである。彼等の愛は人間を暖かく包み込む愛であり、他の人たちが幸せになることを願う愛であり、与える愛であることがその特徴といえるだろう。

結び

かつてグリーンの作品は、宗教論を別にすれば、*Our Man in Havana* や *The Human Factor* において見られるようにイズムや倫理観、愛国心や正義観などの人為的な価値観には重きを置かず、夫妻の絆、親子の絆といった家族間の愛に重きを置く傾向があった。その傾向は今回の作品、*The Honorary Consul* においても同じであるが、既に見てきたようにその愛の形態は家族愛の枠を大きく超えて、より大きくより深い包容力に富んだ人間愛の方向に向かっていることは明らかである。この事実はグリーン自身の人間的な成長を意味するものか？　あるいは、老境にさしかかったグリーンの心境にあらゆる人間に対する愛おしさが芽生えてきたものか？　いずれであるかは不明だが、彼の作品に描かれてきた愛の本質について変化が生じてきたことだけは確かなように思われる。そして間違いなく言えることは、いかなる愛の形であれ、希望を持てなくなった者が最後に頼るものが愛であることだけは確かである。何故なら、"love is the form hope must assume to survive and to give the comic drama of life a shape and a meaning."[14]

愛の質に格差を付けることは不可能かもしれないが、少なくとも自己中心的な愛は他人を思いやる思慮に欠ける独善的な資質を持つものと言わざるを得ない。また家族愛には夫婦や親子、場合によっては近親者に対する一種偏見的、あるいは偏狭的と言える独特な絆によって結ばれた排他的な愛の世界を多くの小説や物語の中に見ることが出来る。しかしながら、キリストや釈迦があるいは神があらゆる人間を暖かく包み込む人間愛は観念的には理解することが可能であっても、実際問題としてその愛の形を実行することは非常に難しいことであり、愛を如何に普遍的で深遠な段階まで発展させるかが問題であるといえるのではないだろうか？

Notes

1）Graham Greene, *The Honorary Consul*, (London: William Heineman & The Bodley Head, 1980)
2）野口啓祐、『グレアム・グリーン研究Ⅰ』、東京、南窓社、1974年、p. 275
3）小田島雄志訳、『名誉領事』、東京、早川書房、昭和61年、p.94　以後本文中の翻訳については頁数のみを表記
4）Neil McEwan, *Graham Greene*, (HongKong: The Macmillan Press LTD, 1992) p. 107
5）A.A. DeVitis, *Graham Greene* (Boston, Massachusetts: Twayne Publishers, 1986), p.135
6）Georg M.A. Gaston, *The Pursuit of Salvation: A Critical Guide to the Novels of Graham Greene*, (Troy, New York: The Whitston Publishing Company, 1984) p. 119
7）A.A.DeVitis, *Graham Greene* p, 136
8）Robert Hoskins, *Graham Greene; An Approach to the Novels* (New York and London, Garland Publishing, Inc.

1999) p, 228

9) R.E. Miller, *Understanding Graham Greene* (Columbia: University of South Carolina, 1990), p.134

10) Robert Hoskins, p.228

11) Neil McEwan, *Graham Greene*, p. 112

12) Graham Smith, *The Achievement of Graham Greene*, (New Jersey: Barnes & Noble Books, 1986) p. 182, (Plarr) は筆者記入

13) 野口啓祐、『グレアム・グリーン研究Ｉ』、p. 285

14) Richard Kelly, *Graham Greene*, (New York, Frederick Ungar Publishing Co., 1984), p.93

On *The Honorary Consul*
— Qualitative Difference of Love —

Toshihiko UEKI
College of Liberal Arts and Science for International Studies
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received September 30, 2003)

In *Our Man in Havana* and *The Quiet American* Graham Greene described that love between husband and wife, man and woman, or parent and child is a more important factor to believe and live up to than principle, ethics, a sense of justice and nationalism which are often used by leaders and politicians to maintain the political system they dominate. Though *The Honorary Consul* is regarded as one of the essential works to understand the religious thought of Green, but we put that problem into many criticisms. In this paper we want to turn our attention to the qualitative differences of love among self-love, parental love, and conjugal love noticed in the former works and more profound and altruistic human love in the latter work, and throw light on them.